

前回科挙の試験の続き 科挙にまつわる漢詩

◆中唐の孟郊^{もうこう}はたびたびの落第のあと、悲しみを次のように詠っている。

「再下第」

(再び下第す)

孟郊

下第Ⅱ落第

一夕九起嗟
夢短不到家
夢は短く家に到らず
両度長安陌
空将淚見花
空しく涙を将^もつて花を見る

やつと及第したのは三度目で、すでに四十六歳の高齢であった。

合格の喜びを詠った詩は次の通りである。この詩は後世長く伝誦された。長年の鬱屈から解放され、得意の絶頂にある詩人の気持ちである。

「登科后」 孟郊

昔日齷齪不足嗟
今日曠蕩思無涯
春風得意馬蹄疾
一日看尽長安花
これまでの不運をあくせくと何であのように嗟いたのやら
今日は前途洋々、思い出せばかぎりない感懷だ
春風も吹くし、おれも得意だし、馬の足も軽い
一日中見歩いた長安の花はなんと美しいことか

孟郊は科挙の浪人中に母が旅支度をしてくれた。

何回目の受験かはわからないが、母を思う子の情が詠われている。

「遊子吟」

慈母手中綫^{いと} 遊子身上衣 臨行密々縫 意恐遲々歸 誰言寸草心 報得三春暉

一寸の草(自分)でも春の暉(母)のめぐみを受けるというが、母の愛には寸草の心で報い得るものではない、と年をとった息子が詠うのである。 「続漢詩の散歩道 一海知義 日中出版」

王維が受験準備のため故郷の山西省から長安に一人で出てきた。

次の詩は十七歳の時のもので、感情の流出がすなおで、明快な詩である。

「九月九日憶山中兄弟」

(九月九日山中の兄弟を憶う) 王維

独在異郷爲異客 独り異郷にあつて 異客となり
每逢佳節倍思親 佳節に逢う毎に 倍^{ます}ます親を思う
遙知兄弟登高処 遙かに知る 兄弟 高きに登る処
偏挿茱萸少一人 遍^{あまね}く茱萸^{しゅゆ}を挿^さすも一人を少^かかん 茱萸^{しゅゆ}Ⅱハジカミ邪氣払いの草

十七歳の少年にとっては、たった一人「独」ということは強烈で深刻な経験であつたはずだ。新年とか節句といった佳節がくるたびに、ますます親しい人たちのことが思い出される。重陽のしきたりには、高いところに登る行事がある。故郷で兄弟たちが、その登高をしているだろう。みんな茱萸^{しゅゆ}を髪にさしているが、そこにいるべき人が一人いない。それは他ならぬ私だ。王維の弟の王縉^{おうしん}はのちに、宰相にまでなった人物で、官界での履歴からいえば、兄よりよほど昇進した。しかし、文学上の名声からいえば、王維のほうが格段に優れていた。

盛唐の王維は二十一歳で進士に合格した。

中唐の白居易が進士に合格したのは二十九の時であり、韓愈は二十五の時であった。蘇軾は二十一歳、弟の蘇轍が十七歳で合格した例もあるが、このようなことはまれである。ちなみに、韓愈の三十二歳のときに生まれた息子昶は父と同じ二十五歳で進士に受かっている。

白居易の勉強ぶりについて、自身の言葉。

「五、六歳の時から詩作を学び始め、九歳で押韻の規則を身につけました。十五、六歳のときに、進士を目指した勉強を始め、二十歳以後は昼も夜も休む暇なく努力を重ね、口には瘡ができ、指にはタコができました。肌はつやを失い、髪や歯は老人のように衰え、目には無数の蠅が飛ぶありさま（飛蚊症?）、これは無理を重ねたせいでしょうか」

◆落第は、世の妻たちにとっても、辛いことは同じであった。杜羔の妻趙氏に次の詩がある。

「夫下第」

（夫の下第）

良人的有奇才

良人は的々として奇才有るに

的々||明るく輝く

何事年年被放回

何事ぞ年々放たれて回る

如今妾面羞君面

如今 妾が面は君の面を羞ず

君若来時近夜来

君若し来たる時は夜の近きに来れ

落第したのだから白昼堂々と帰ってくるなどいうのである。手紙でこれを読んだ作者はまた長安に引き返したという。この厳しい奥さんに尻をたたかれて杜羔もやっと進士に及第した。この奥さんはその時また次の詩を作った。学識のある女性だったのである。

「聞夫杜羔登第」

（夫杜羔が及第したと聞いて）

長安此去無多地

長安 此より無多の地

無多||気楽な

鬱鬱葱葱佳氣浮

鬱々 葱々として佳氣浮かぶ 葱々||草木が青々としげる

良人得意正年少

良人 得意にして正に年少

今夜醉眠何処樓

今夜 酔いて何処の楼にか眠らん

及第すればまた別な心配が出てくる。及第すればもはや長安は恐れるべき土地ではなくなり、夫は意気軒高として若者気取りで美酒に酔ってどこかの妓楼で眠っているのか。杜羔は貞元初年（七八五中唐）の進士で、官は後に工部尚書（建設大臣）になった。これも夫人の内助の功が効いたのかもしれない。

「唐詩新選 陳舜臣 新潮文庫」

◆晩唐の曹松は、「五老榜」といって七十余歳の五人がともに特別に進士に及第した一人であるが、詩を作る以外実務の能力を欠いていたため、偉くはならなかった。しかし、次の有名な詩を残している。

「己亥歲」

（己亥の歲）

曹松

己亥||八七九年

澤国江山入戰圖

沢国の江山 戦図に入る

沢国||水郷

生民何計樂樵蘇

生民 何の計あつてか樵蘇を楽しまん

生民||人々 樵・蘇

憑君莫話封侯事

君に憑って話す莫れ封侯の事

封侯||手柄をたて大名になる

一将功成萬骨枯

一将 功成つて万骨枯る

黄巢の乱のときのこと、良人を戦争に送り出した若妻が、手柄を立てて大名になってくれとは

言わないでくれ、一人の將軍が手柄をたてるかげには、一万人の兵士が死んでいるのだからと。

◆南宋のはじめ、殿試がすんで新進士の名前を一人ひとり呼びあげる際、天子が見ていると新進士の中に、ひどく年とった白髪の翁がいるのが目にとまった。呼び寄せて年齢をたずねると七十三歳（名は陳修という）であった。幾人の子供があるかと聞くとまだ独身だという。天子（高宗）はいたく同情して、宮人の中から施氏という三十歳の美人を賜って娶らせた。また詹義（不詳）という人が老年になって、やっと進士及第後に自らを嘲る詩を作った。

「登科后解嘲」

詹義

読尽詩書五六担 車にいっぱい積んだほどの経書を読んで

老来方得一青衫 老いこけてからやっとありついた官僚様の肩書

佳人問我年多少 娘たちに年はいくつと問われたら 青衫Ⅱ下級官吏

五十年前二十三 五十年前二十三の美少年さ 「科挙 宮崎市定 中公文庫」

三十一歳で受験して一回で進士に合格した張籍には、早世した孟寂（孟郊の従弟）の死を悼む詩がある。

「哭孟寂」

（孟寂を哭す）

張籍

曲江院裏題名処 曲江院裏 題名の処

十九人中最年少 十九人中 最年少

今日春光君不見 今日春光 君を見ず

杏花零落寺門前 杏花零落す 寺門の前

進士に及第すると、慈恩寺の大雁塔に登り、合格記念に各人の名を壁に書きつける習慣が八世紀ころから生まれた。これを「題名」という。将来この仲間から將軍や宰相になるものが出ると、名前を朱色にうめるという習わしも生まれた。長安の曲江にある慈恩寺の塔に名を記した者は十九人いた。この詩の意味は、君は最年少でこの名誉を勝ち得たが、早くこの世を去った。今年あんのずの花が散るが、若い俊才を見ることができない。である。

（余計なことだが、孟寂は三体詩によると 科挙を十七人中、十六番で及第したとある。他に二名は諸科）

◆礼部（文部省）主催の科挙に受かって進士になっても、職に就くには吏部（尚書省の六部の一つで官僚人事を司る、いまの総理府）主催の吏部試（官吏採用試験）がある。

吏部の試験は身・言・書・判の四部門からなり、筆答試験と面接試験の併用である。「身」は官吏としての威厳を損なわぬよう、風采が堂々としていなければならない（体貌豊偉）、ぶ男や体つきの貧弱な者は不合格となる。「言」は言葉になまりが無く弁舌さわやかであること（言詞弁正）。どもりなどは落第である。「書」は文字がきれいに書ける（楷法適美）。「判」は明快な判決文が書けるか（文理優長）のテストとなる。

元和十五年の李建が知貢挙（試験の責任者）のとき、進士科に二十九人が及第したが、その中の一人崔嘏は独眼であった。試験は知貢挙の人柄によっても影響されるといことだろう。

◆状元合格の裴思謙は平康坊の妓女から後朝の別れに合格の詩を贈られている。

妓女の名は伝わっていない。「全唐詩」はこの題を「平康妓裴思謙に贈る」としている。

「贈裴思謙」

(裴思謙に贈る)

銀釭斜背解鳴璫
小語偷声賀玉郎
從此不知蘭麝貴
夜来新染桂枝香

銀釭斜背鳴璫を解き
小語偷声玉郎を賀す
此れ従り知らず蘭麝の貴きを
夜来新たに染む桂枝の香

平康Ⅱ長安の花柳街
鳴璫Ⅱ耳だま 釭Ⅱもし火
玉郎Ⅱ合格したあなた
蘭麝Ⅱ蘭の香と麝香

ともしびを後ろ斜めに置いて、部屋をうす暗くして耳だまを解き、小声でお祝いを述べました。これからは、私が身に着けている麝香を思ってくれなくなるでしょう、あなたの身は昨夜来、桂の香りが新たにしみ込んでいますので。

「中国の女詩人たち 中津濱渉 朋友書店」

◆晩唐に状元合格の盧肇ろちょうの詩に「及第後江寧に競渡を觀て袁州刺史成応元に寄せる」という題の詩がある。作者は晩唐の袁州（江西省）の人で、進士に第一位の成績で合格した。

盧は家が貧乏であった。同郷の黄頗こうはと名声を等しくしていたが、黄は金持ちの有力者の息子であった。二人が都で行われる科挙に赴くとき、州の長官は盧を軽んじ、黄にだけ送別の宴を開いてはなむけとした。翌年、盧が状元として郷里に帰ると、州の長官以下がそろって出迎えたいそう恥じ入っていた。このとき招かれて競渡の大会の催しを見学したとき、その席上で詩を作った。「あなたに向かつて是（私）れ龍なりと道いうも剛ひとえに信ぜず、果然として錦標（錦の旗）を奪い得て帰る」として長官たちを見返した。競渡の船が龍の頭を飾りつけ競争しているのを自身に見立てたのである。彼は安徽の四州の刺史になった。「唐詩歳時記 植木久行 講談社学術文庫」

◆韓愈かんゆの試験官への売り込み

韓愈のごとき俊才も、二十五歳で進士に合格したが、吏部の任用試験（関試という）博学宏詞科は三度も失敗し、十年間職にありつかなかった。中唐を代表する韓愈ほどの人でも、受験は心配するものであったらしい。「一挙手一投足」は、ちょっとした動作とか、ほんのわずかな努力という意味である。韓愈の「科目に応ずる時、人に与う書」という手紙に初めて出てくる言葉である。

試験官あてに、自分を売り込み、自分の文才を知ってもらうために提出したもので、格別の留意と引き立てを要請している。堂々たる名文章だが、難解に過ぎるので解釈文をかかげる。

（前略）海や大河のほとりには、凡庸な魚や貝とは違った怪物がいるといわれ一旦、水を得れば風雨を呼んで昇天しますが、水を得ないときは一尺、一寸に過ぎません。つまり水のある場所へ運んでやらぬ限り、大を成し得ないのです。

私こそ、まさにその怪物です。有力者である貴官が私を憐れみ、水辺まで運んでやろう（試験に合格させてやろう）という気持ちさえお持ちくだされば、それはほんの一挙手一投足の苦勞でしかありません。何とぞよろしくお願い申し上げます。（後略）

この手紙はかれが二十六歳の時、吏部の試験を受けるために都にのぼり、試験官に差し出したものである。家柄の良いものは任官されやすかったが、韓愈は父と兄を幼少の頃に失い、家のバックが弱いために自己推薦に努めざるを得なかった事情もあるうが、才能を売り込むことは中国の士大夫（知識人）社会ではごく普通のことであった。

韓愈は散文の名人でもあった。雑説四首のなかでも「世に伯樂ありて、然る後に千里の馬あり。千里の馬は常にあれども、伯樂は常にはあらず」と言って、明君が伯樂であり賢臣が千里の馬

であるという例えで両者の役割を巧妙に言い切っている。「唐宋八家文 佐藤一郎 明德出版社」
 なお、天子の傍で仕事をする翰林院編修というポストにつくのは、科挙上位合格者のエリートであった。国家の政治をするには文才を問われたのである。

◆ 詩人の科挙の成績を見てみよう。

王昌齡（盛唐）二十五歳で進士合格、七言絶句の聖人とよばれる

孟浩然（盛唐）四十歳をすぎて襄陽から長安に出て、進士の試験を受けたが及第しなかった

王之涣（盛唐）若くして俠気あり、富豪貴族の子弟と交わり、剣を撃ち狩猟に浸り酒に浸った、やがて節を折って文を学び、十年にして名が挙がった。しかし科挙に苦しむを恥じて進士を狙うことをあきらめ、ひたすら名門の諸侯と交わった

岑参（盛唐）三十歳のころ進士に二位で及第、（二十九人中）

盧綸（中唐）何度も受験するがついに及第せず、その後監察御史・県令・元帥府判官を歴任

王維（中唐）二十一歳で進士合格

韓愈（中唐）二十五歳で進士に受かったが、博学宏詞科には三回続けて落第、官庁に採用されたのは進士合格から十年後

柳宗元（中唐）二十一歳で進士、五年後に博学宏詞科に合格

劉禹錫（中唐）二十一歳で柳宗元と同時に進士、博学宏詞科に合格

白居易（中唐）十六歳で長安に上り受験勉強を開始した。二十三歳で父の死があり、三年の喪について、後に資金面を長兄に頼った

二十九歳の最初の受験で進士、十七人及第中の最年少、四位の成績。三十二歳で試験拔萃科に及第（八人の中に三位の元稹もいた白は四位）三十五歳で才識兼茂明於体用科に合格（合格は四人で二番の成績、一番は元稹）

元稹（中唐）十五歳で明経科に合格、二十五歳で拔萃科に合格、二十八歳で才識兼茂明於体用科（制科）に一位で合格して左拾遺（皇帝に諫言する職務）になる

李益（中唐）二十一歳で進士、昇進が同輩より遅れたのが不満で、微官を捨てて地方の節度使の幕僚となったが、その詩名を憲宗に知られ、秘書少監に挙げられ、礼部尚書（文部大臣）となった、非常に嫉妬ぶかく、妻妾の部屋に鍵をかけて不義を防いだので時人が彼を妬痴と呼んだ。（妬・ねたむ、痴・ばか）

孟郊（中唐）何度も落第し、四十六歳で進士、狷介な性格で他人と合わず五十歳にしてはじめて官吏として溧陽の尉となったが、職務を怠り作詩にふけたため、俸給を半分に削減されたという、苦吟の詩人として知られ、不遇で一生貧に苦しんだ、ただ十七歳年上の韓愈とは忘年の交わりを結んだ

李賀（中唐）二十歳のとき、河南府試に及第して、中央の試験をうける資格を得た。しかし、彼の亡父の諱（本名）が晋肅だからそれと同音の進士の試験を受けるのは、子として父の名を諱み尊ばない親不孝の行為に当たると、その才能をねたむ反対派の中傷で進士の受験資格を奪われた。じつに理不尽な理由で科挙を受験できなかった。（儒教では他人を呼ぶときは実名を用いず字名で呼ぶことが良いとされた、忌むとされ諱を呼ぶことは避けていた）受験をあきらめ一旦は故郷に帰ったが、しかし長安への未練をすてきれず、翌年再び長安に出てやっと縁故を通じて得たのが、奉礼郎という宮中

の儀典関係の属官（従九品上）であった。人生の路をばまれ鬱々として志を得ず
 「長安に男児有り二十にして心すでに朽ちた」と詠じている、
 詩は韓愈ら一流の詩人に評価され、後世「鬼才」と呼ばれた早熟の天才であったが、
 二十七歳の若さで没している

賈島（中唐）

約二十年間落第し続け、囊中空しくついに出家して長安の青竜寺にいた、韓愈は
 彼に僧をやめさせて進士に推挙したが落第した、地方の主簿や司倉になり極貧の
 中で死んだ

杜牧（晩唐） 二十六歳で進士、賢良方正科にも合格

李商隱（晩唐） 二十七歳で進士、五回目で合格。二十九歳で書判拔萃科に合格

韋莊（晩唐） 五十九歳で進士、父を失い、貧しい中に学につとめ、四十を超えて長安に戻り科
 挙に応じようとしたが、黄巾の乱により彼は兵中に陥り、弟妹を見失い、漸く
 白刃のなかでめぐりあうなどの事件にあい、さらに大病を患って言語に絶する苦
 労をした、進士及第の三年後に四川省に派遣され唐が滅んだのち蜀（四川省）の
 王建に仕え宰相となる（五代十国のひとつで唐の滅亡後、節度使が地方で国を建てた）
 科挙の受験生の秀才のときに作った七言二三八句の「秦婦吟」は今世紀になって
 敦煌の石室から発見された

温庭筠（晩唐） 若くして文才をあらわし、軽艶の詩を作った、酒を飲み賭博に耽り、長安の遊廓
 で遊びまわって素行不良で有名になったため、どんなに立派な答案を書いても
 及第させてもらえなかった科挙の万年落第生だった、また八五五年には複数の
 高級官僚を巻き込んだ大規模なカンニング事件が正史に記録されているが、事前
 に漏洩した課題の詩を代作してやったのは温庭筠であった

李商隱とともに晩唐を代表する詩人だが流落して死んだ

羅隱（晩唐）

十たび進士に落第して帰郷し、地方官に仕えて司勳郎中などの官位を得た、後の
 梁の太祖が即位して給仕中（天子の秘書役）に招聘したが赴かなかった

陸龜蒙（晩唐）

及第せず、地方長官の幕客となったが、郷里に隠棲した、文名高く風雅の名士と
 して知られた

欧陽脩（北宋）

十七歳で州の予備試験に落ちたが、二十四歳で進士首席合格（状元）、欧陽は姓、
 名は脩である 門下に王安石 蘇軾などを出す

蘇軾（北宋）

二十一歳で弟と共に進士となる、殿試で三八八名の合格者の最高位に近い成績、
 その前の会試は二位だった。十八歳のときすでに結婚していた。二十六歳で官吏
 任用の特別試験（制科）にまた弟と共に合格

王安石（北宋） 二十二歳で進士、八三九人中、四位の成績

陸游（南宋） 二十九歳で一次試験を受験、試験委員長の答申は陸游が一位、宰相秦檜の孫が
 二位だったが、秦檜がこの結果を知り、陸游を恨み、本試験（省試）に介入して
 省試で孫を一位にして陸游を落第にした。しかし高宗は殿試でこの孫を三位に
 降格させて皇帝の権威をしめしている。秦檜の死後、進士出身の資格を皇帝から
 賜ったが、一生を地方の副知事、中央に出ても史料編纂官に終わった

この時、同期合格した范成大^{はん}は、四川制置使・待制の高官の時、昇進が遅れていた五十一歳の陸游を幕下の参議官に昇進させて招き、詩友として対等に待遇した

范成大^{はん}（南宋）二十九歳で進士

梅堯臣^{めい}（南宋）叔父が大官（翰林侍讀学士）であったため、無試験で官僚に採用された

朱熹^{しゆ}（南宋）十九歳で進士 下位で辛うじて合格

文天祥^{ぶん}（南宋）二十歳で進士、一位合格（状元）

杜甫^ふ（盛唐）二十四歳で進士科の試験を受けて落第、三十五歳のとき玄宗が詔をもって在野から

一芸一能に秀でた者を募った臨時の試験を高適・元結らと受験するが落第、時の宰相李林甫が尚書令に命じて全員を落第させたのである、その理由は、今や賢者はここごとく朝廷に集まっついて「野に遺賢なし」というのであった

「八月十五夜月」の詩に攀桂^{はんけい}仰天高の句がある。攀桂とは科挙に及第することである。月の中に桂の木がありそこに登って枝を折り取ることからきている。自分にとって雲の上ほど高い望みである月をみて科挙を連想している。

李白^り（盛唐）受験していない。唐の時代は科挙の制度が未整備であり、商人階層（李白の父は蜀の大商人）は受験できない規則があった、また、父の本籍が西域であったため受験

資格が無かったとも伝えられている

◆晩唐の羅隱^{らい}は「偶興」と題する七言絶句を作っている。

遂隊^{すい}随行二十春 隊^おを遂い 行に随う二十春

曲江池畔^{きやう}避車塵 曲江池^{きやう}進士及第者が天子の祝宴を賜る処

如今^{じよ}贏得^か將衰老 如今^{じよ}贏^かち得たり衰老^{もつ}を將て

閑看^{けん}人間得意人 閑^{けん}に看る 人間得意^{じんかん}の人 人間^{じんかん}この世

一句目はおおぜいの人が行く方向に、自分も従ったという意味で、受験のことである。

二十年も落第をつづけ、賜宴にむかう及第者の車がまきおこす砂塵を、曲江池畔で避けねばならなかった。悔しい限りであったが、いま衰老の歳になって、ようやくこの世でときめいている人たちをのんびりと眺めることができるようになった。贏^{えい}とは勝ち負けの勝ちであり、最近、老いてからやっと羨^{うらや}むことがなくなったというのである。

「旧五代史」の彼の伝によれば、「譏諷^{きふう}する所多きを以っての故に第^{だい}に中^{あた}らず」となっている。才^たを恃^たんで傲慢なところがあつたのが、落第の原因だったという。

この詩は三体詩によると、唐の末に朱全忠（後の梁の太祖）が、自らの讓位の障害になる大臣たち七人を河南省滑県の白馬駅で黄河に投げ込んで殺した事件を白馬の禍^{わざ}というが、羅隱がこれを聞いて作った詩であるという。

つまり自分も科挙に合格して出世していれば同じ目にあつたかもしれないという感慨を寓するものである。そうならば転句の贏^かち得たりはまさにぴったりする。

◆牛李の党争

唐末に、有力政治家の牛僧儒^{ぎゅうそうじゆ}と李德裕^{りてく}が二派に分かれて政権を争った事件である。

牛僧儒（進士出身）は科挙出身者を政治に登用すべきと主張し、李德裕は名門貴族の家柄から人材登用すべしとして争った。十二代の穆宗^{ぼく}から十六代の宣宗まで牛党と李党が交代して政権をとり、

相手を左遷し、最後の宣宗のときに牛党が勝利した。

◆清の蒲松齡は怪奇短編小説「聊齋志異」^{りょうしょうしぎ} 五百余編（この短編集はどの家にも一編は備えられたと言われるほど愛読された）や啓蒙書、実用書を多数書いた作家である。十九歳で地方の予備試験、県試、府試、院試をいずれも首席で合格した。しかし、郷試を受けるが失敗、以後三年ごとの試験を計十一回落第。この間家庭教師などで家族を養う。この時、長男が二十七歳で秀才に合格したこともあって、五十一歳で受験をあきらめ著作活動に専念し、作家として成功を収めた。

◆科挙は国民の誰もが受験できた。志のある者はどうしても四書五経の勉強をしなければならない。つまり儒教は受験用の学問になってしまった。儒の理想はバランスのとれた教養をもつ人間になる（多芸多才）ことであつたが、大きく崩れてしまったのである。数学は一時期明算科にあつたが、主流の進士科の試験科目に無かつたので、研究されなくなった。科挙時代にどれだけ多くの理数系の人材が失われたことか。

逆に儒教の悲劇は国教化されたことで他の思想や学問が排除されたのである。

日本は科挙を受け入れなかつたのは正解であつた。江戸時代に朱子学以外にもさまざまな学問が取り入れられ、欧米の文化を受け入れ発展できたことは、その後の明治維新を受容して文化の多様性につながつたのである。

「儒教三千年 陳舜臣 中公文庫」

◆科挙を何度受けても及第しない梅堯臣が地方の小官として苦しんでいるとき、欧陽脩はかれに困窮すればするほど詩がうまくなると言っている。不平不遇の叫びから優れた詩や文学が生まれると考えることによって、現実の不遇が埋め合わされるという考えは、韓愈が孟郊に言つたことでもある。これは科挙に合格できない膨大な数の落第知識人の一つの救いとなり、孔子の教えを勉強したことが儒教国家を彼らが下から支え、中国の盛んな文学を支えたのである。

科挙は六世紀の隋に始まり清末の一九〇五年に廃止された。

日本では高等文官試験が明治二十年（一八八七）からはじまつている。

「不平の中国文学史 大木康 筑摩書房」

最も民主的と称される英国においてすら、自由競争の文官試験制度が一般に採用されるのは一八七〇年以降のことである。科挙はこの一三〇〇年前の隋によって始められたのである。

◆元の時代は、科挙は五十年間実施されなかつた。フビライが死んでから復活した。しかし、少数のモンゴル人が大多数の漢人を支配するため、政策は著しく公平を欠いていた。例えば、一三二四年の科挙の合格者の内訳は次の通り。（漢人・南人の合格比率は極めて低かつた）

	人口	郷試	会試	殿試
蒙古人	一〇〇万	七五人	二五人	一四人
色目人	一〇〇万	七五	二五	一四
漢人	一〇〇〇万	七五	二五	一四
南人	六〇〇〇万	七五	二五	一四

一三二七年に色目人の政治家・詩人の薩都刺^{さつとら}は五六歳で進士及第（状元）

四 詩人が左遷された理由

官職についた多くの詩人は、色々な理由で左遷、免職、刑罰を受けている。

中国の文人は政治の中にいたので、常に国家や国民を想いながら、日常的には、天子や上官の顔色をうかがい、政争にまき込まれ、左遷、免職、返り咲きをくり返した。

・謝眺しゃちょう

南北朝の南齊の大詩人。宣城太守や尚書吏部郎などの高官を務めた。傲岸不屈ごうがんの文人で、始安王の遙光を即位させようとする一派の誘いに乗らず拒んだので、遙光の怒りを買って捕えられて獄死。（李白は南北朝の詩は評価しなかったが、彼の詩だけは敬慕していた）

・高適こうせき

（盛唐）若い時正業につかず、任侠をこととし博徒と交わっていた。安祿山の乱で功績をあげ、またたくまに出世した。侍御史、諫議大夫かんぎたいふにまで昇進したが、氣位が高く、づけづけ物を言うので権力者から嫌われ、洛陽の太子詹事せんじ（皇太子の執事）に左遷。また地方に出されてあちこちの刺史、西川節度使を歴任。歳五十にして詩を作り始めた。その後、都に戻り刑部侍郎（法務次官）となった。「旧唐書」では唐王朝で詩人として栄達したのは高適だけであるとしている。（白居易や元稹も三品官になっている）

・王維おうい

（盛唐）礼部侍郎をやめて一度山荘にこもったが復帰して給事中（天子の秘書役）のとき安祿山の反乱軍に捕らえられ、迫られて賊軍の給事中にさせられた。そのため乱平定後、五十六歳にして裁きを受けた。弟の縉しんが自分の官位刑部侍郎（法務次官）を削って兄の減刑を願った。このため太子中丞に降ろされただけですんだ。その後再び尚書右丞（長官と副官の補佐）になった。

・杜甫

（盛唐）四十六歳のとき肅宗により門下省の左拾遺さしゆうい（天子の落ち度を諫める役）になったが、翌年、宰相房琯の罪（安祿山の軍に大敗）を剛直に弁護したことから職を越えた行為とされ天子の肅宗の不興を買って、華州の司功参军（州の属官で人事教育などの担当）に左遷された。長安で朝廷に仕えたのは正味一年足らずであった。

・白居易

（中唐）数え年三十七歳のとき、晩い結婚をした。官位も高く、境遇も良かったが、きまじめな性格で、悪をにくみ、民間の苦しみに同情して、しばしば諫書かんしゆを提出したため、権門貴族から排斥された。四十三歳のとき太子左贊善大夫（五品洛陽の皇太子の侍従）といった閑職に追いやられた。四十四歳でこの職にいたとき、宰相の武元衡が登朝の途上暗殺された。（彼は朝廷を悩ます藩鎮の跋扈に対して討伐を主張する急先鋒であった。朝廷では討伐派と妥協派との対立が生じていた）

白楽天は事件の日の正午に、実行犯の逮捕で落着かせてはならず、裏で操っている者を捕えるべしと上奏した。これが越権行為とされた（皇太子づきの官が皇帝に上奏したこと）。

直ちに江州司馬（刺史の補佐）に降格させられ、家族を連れて二か月の旅をして赴任した。

・韓愈かんゆ

（中唐）三十六歳の監察御史（官吏の罪を取り締まる職）のとき、京兆尹（首都の知事）の李実を弾劾した。しかし皇族の李実が韓愈をはねつける実力を持っていた。韓愈は逆に広東の陽山の県令に左遷された。

五十二歳で刑部侍郎（法務次官）のとき、皇帝憲宗が宮中において、仏舍利供養を営んだのに反対、「仏骨を論ずる表」を上奏し、異国の神である仏教を信仰する天子の寿命は短いと極論した。帝の逆鱗に触れて、死刑に処せらるるところを、宰相の裴度ばいどらのとりなしで死を免れ、潮州（広東省）刺史として流された。

・賈島かとう

（中唐）何度も科挙に落第した末に、僧となり、長安へ出て青龍寺に住んだ。元稹・白居易の平俗な詩風に反対し、苦吟して詩を練るべきだと唱えて有名になり、韓愈に認められて、

還俗して進士に及第（唐詩三百首では及第せずとある）したが、青龍寺に微行していた宣帝に無礼を働いた。（鐘樓の上で賈島が詩を吟じていると、宣宗が登ってきて詩巻を取り上げた。天子とは知らず睨みつけて奪え返し「身分が高いだけでこの詩が分かるものか」といった）

このため四川省の田舎の主簿（九品）として都を追われた。 「唐詩選下 岩波文庫」

・柳宗元

（中唐）三十三歳のとき、王叔文、韋執誼らの引き立てで順宗の信任を得、礼部員外郎となり、彼らと共に政治改革に取り組み、減税、宦官の駆逐、宮女の解放などに乗り出したが、病身の順宗が退任したため、一年足らずで改革は挫折。守旧派と宦官によって、永州司馬（刺史の補佐）に左遷され、のちに中央に戻されてもすぐに柳州（広西壮族自治区）の刺史に追われた。

・劉禹錫

（中唐）政治改革の意欲を持っていたため、守旧派の恨みを買ひ、王叔文事件に連座して、郎州（湖南省）の司馬に左遷。のちに中央に戻されたが、玄都観の花見の宴で詠んだ詩が、当局誹謗の意ありとされ、またも連州（広東省）の刺史に左遷された。

のちに中央に戻され尚書省の礼部郎中（部長格）になったが、上司であった名臣裴度（裴度）の死後、蘇州刺史に転出された。改革派の柳宗元とはとりわけ親友であった。

・元稹

（中唐）左拾遺（君主を諫める役）のとき、鋭い時局批判を行い、河南の尉（賊を捕まえる地方官）に左遷。監察御史（地方をまわって州県の裁判、軍事、出納などの監察をする官）のとき、宦官の仇士良と喧嘩して顔を傷つけられたうえ、土曹参軍（地方官の文書の誤りを正す役）として江陵に放逐された。またその後も通州（四川省）に左遷された。十数年の左遷ののちに都に戻され、のちに累進して中書門下平章事（宰相）になったが、政争にまきこまれ失脚して最後は武昌の節度使として亡くなった。

・蘇軾

（北宋）四十四歳、湖州（浙江省呉興県）の知事のとき、彼の詩が朝廷を誹謗したとして捕えられ、死刑をも覚悟させられるほどの厳しい審問の末、黄州に流罪。

旧法党が政権をとると中央に召し帰された。五十九歳で礼部尚書（文部大臣）のとき、哲宗の親政によって新法党が復活すると、再び追放されて惠州（広東省）へ流罪。さらに、六十二歳のとき、海南島の儋州へ追われた。あわせて十四年間におよぶ流罪の末に、哲宗が崩じると放免された。都へ帰る途中、病にかかって退職を乞い六十六歳で死亡。

・陸游

（南宋）二十九歳のとき、時の宰相秦檜（秦檜）の個人的な妨害で、省試を落第させられた。秦檜の死後、三十八歳で孝帝によって進士の資格を賜った。枢密院の編纂官となったが、金への抗戦か和睦かで両派が対立、対金強硬派の陸游は朝廷を批判して鎮江府（江蘇省）に左遷され、四十一歳でも隆興府（江西省）に左遷、さらに四十二歳で免職になった。故郷の紹興に引き籠ること三年、ようやく四十五歳、夔州通判（副知事）となり復帰した。三年後、水害に遭って、独断で官有米を農民に与えたため免職となった。六十二歳で嚴州（浙江省建徳）の知事代理のあと、軍器少監に任じられ、光宗が即位すると、主戦論者として処分された。六十五歳で礼部郎中（尚書省の部長格）のとき四度目の免職となる。

・高啓

（明）戸部右侍郎（大蔵次官）だったが、辞退して故郷に帰った。この長官魏観が府庁舎を改修し、これが謀反と密告され、死刑となる事件があった。高啓は府庁の上梁文を魏観に頼まれて書いていたため、連座して腰斬の刑（重罪人に課す刑）に処せられた。また太祖（朱元璋）の好色を諷刺した詩を作っていたことも影響した。

このように中国の詩人は政治の中にいたので、政争にまき込まれたが、日本の文人は政治に関わることを俗とし、そこから超然として花鳥風月に浸ることができたのである。

しかし日本の平安時代、**菅原道真**は右大臣という最高位の地位にもかかわらず、左遷された。菅原道真は十八歳で大学寮の文章生に及第、紀伝道（儒学を基礎とした実務官僚を育てる機関）に属し、二十三歳で文章得業生、二十六歳で対策に及第、三十三歳で文章博士（中国の文学歴史を教授する官職）となる。宇多天皇に認められ異例の出世をはたす。五十歳には参議・式部大輔・左大弁・勘解由長官・春宮権官・侍従・遣唐大使を兼ねる。五十五歳で右大臣（このとき藤原時平も二十九歳で左大臣に）となる。この二年前に宇多天皇は第七子の皇太子に譲位し、十三歳の醍醐天皇が即位した。そして醍醐天皇の腹違いの弟の齊世親王と道真の娘が婚姻を結んだ。その前に、道真のもう一人の娘が宇多天皇の女御となっていた。

問題は宇多が上皇になっても出家して法皇になっても、道真をいつもそばに置いていたことである。藤原時平と若い醍醐天皇は、妄想を抱き、宇多法皇と知識豊富な儒家の道真の結束をおそれた。道真五十七歳のとき従二位に昇格、同じく時平も従二位となる。その二か月後、醍醐天皇の宣命が届き、それには「寒門の出身から大臣となり、宇多の心情を思いやらず媚びへつらい、天皇の廃立を計画し醍醐天皇の兄弟のあいだを裂こうとした」として大宰権帥（権は仮の意）に任命されたのである。寒門とは貴族の家柄（朱門）ではない儒家の身分で、ということである。

道真の左遷直後の心境を詠った詩は次の通り。

「自詠」 菅原道真

離家三四月 家くわばら 京の桑原の自家（雷対策でクワバラくと唱えるのは雷神と
落涙百千行 なった道真が自分の自宅、桑原には雷を落とさないとはいはずだ、の意）
万事皆如夢
時時仰彼蒼 彼蒼あさ 天をさす 「菅原道真 瀧川幸司 中公新書」

五 李白 宮廷から追放される

李白は唐の詩人であるが、追放された理由は趙飛燕と関係がある。その八百年前の漢の成帝（十一代）の時代に登場する美女、趙飛燕の話である。

◆漢の時代、趙飛燕の名は宜主あししゆといい揚州の出身で、妹は合徳といいともに美人だった。宜主は歌舞を倣ならっていて躰からだのしなやかなことはたとえようもなく、動作の軽やかさは飛ぶ燕を連想させたので飛燕とよばれた。後宮に入ったのは前十八年。成帝は彼女を寵愛して、それまでの班婕妤（婕妤は女官の官位）を追い出し、許皇后も廃してしまった。飛燕は二年後に皇后に取り立てられた。そして妹の合徳をも後宮に召すことにした。

成帝には子が出来ないので、多情な飛燕は次々と男を漁り、なんとか身籠ろうとしたが、ついに妊娠しなかった。これは妹もおなじであった。

悲劇は前七年、成帝の急死で幕を開いた。成帝は体質が弱く精力も減退し名医にかかっても良くならなかった。そんなとき秘薬とされる強壯剤が手に入った。一粒飲むと衰えた体でも、合徳と一度の楽しみが可能であった。成帝はその薬を合徳に渡しておいた。死の前夜、成帝は合徳と寝所を共にし、このとき合徳は一晩で成帝に七粒の薬を飲ませた。その翌朝、成帝は急死したのである。

宮廷内に陛下は強壯剤の飲み過ぎで亡くなったという噂が立った。皇太后の飛燕はすてはおけず妹の合徳を召還して事情聴取した。合徳は寢所でなにがあったかは、誰にも調べられたくないと言って自死した。成帝四十五歳、合徳二十八歳であった。飛燕はそれまでに、他の女が成帝の種を宿すことを怖れ、宮女が身籠ったと知ると、ひそかに母親ごと抹殺してきた。

この事実を調べ上げ、上奏したのが廷尉（刑罰を司る官吏）の解光であった。飛燕を名指しで非難できないので趙昭儀（合徳のこと、昭儀は女官の位）の仕業として告発した。死人に口なしである。

狙いは皇太后の飛燕であることは明白である。皇太子はいなかったもので、飛燕は以前から自分の力で皇太子を立て、成帝の死んだ後の保険にしようと画策していた。元帝の側室傅子（ふし）が産んだ定陶王の劉康の子の劉欣（りゅうきん）を皇太子に立てることを吹き込んで、成帝も同意していた。これが哀帝（十二代）である。哀帝は解光の上奏文を義郎の耿育（こういく）に相談し、彼は詭弁（きべん）を展開して、身籠った宮女の死は成帝の深い考えから出た意向であるとして、告発文は不問に付された。飛燕のかけた保険が実ったのである。哀帝は二十歳で即位し二十六歳で死んだ。彼は同性愛の相手である二十二歳の董賢を大司馬という国家最高の地位に任命するなど愚行が多かった。したがって哀帝にも皇太子はいなかった。

哀帝の死後、権力を握ったのは、外戚（おうちき）の王莽（おうもう）であった。彼は九歳の中山王を立て、自分は摂政となった。これが平帝（十三代）である。

王莽は飛燕の追い落としを計った。飛燕は妹の合徳ともども皇帝の閨房を独占して、世継ぎを亡き者にしたとして皇太后を廃された。さらに、一か月後、姑にたいする道を欠いていたなどの理由で平民に落とされた。飛燕はその詔書を見て毒を呷（あお）った。前一年のことであった。

◆さて、李白が宮廷を追われた原因は次の通りである。

玄宗皇帝が、楊太真（のちの楊貴妃）の美しさと牡丹花の美しさを愛するため、翰林供奉の職にあった李白に歌詞を作らせた。李白は、即座に三首を書き上げた。玄宗は楽人たちに曲をつけさせ、名歌手の李龜年（りきねん）にこの三首を歌わせ、自分も玉笛を合わせて大いに楽しんだ。しかし玄宗の側近の宦官高力士は、かつて宴席で泥酔した李白の靴を脱がせられたことを恨みに思い、この詩は八百年前に、自殺した哀れな趙飛燕を楊太真にたとえたと貴妃に讒言（ざんげん）した。彼女は大いに怒り、玄宗もついに李白を断念することになった。その原因となった李白の詩である。

「清平調詞三首 其二」（清平調詞三首の其二） 李白

一枝紅艷露凝香 一枝の紅艷 露 香を凝らす

雲雨巫山枉斷腸 雲雨 巫山 枉しく断腸

借問漢宮誰得似 借問す漢宮 誰か似るを得たる

可憐飛燕倚新粧 可憐なり 飛燕 新粧に倚る

楊貴妃を牡丹にたとえてその美を称揚し、夢の中で巫山の神女とちぎった楚王の断腸の思いを無駄と断じ、もしむかしの漢宮において似たるものを求めば、趙飛燕が化粧したばかりの姿に似ていると詠じた。李白ならではの華やかな世界の創造である。しかしこの一首で李白は宮廷を追われたのである。李白が玄宗に仕えたのは四十二歳から一年数カ月過ぎなかった。

この時、玄宗は李白に黄金を賜ってやめさせたと記録されている。

「李白詩選 松浦友久編 岩波文庫」 「中国歴史散歩 伴野朗 集英社文庫」

◆なお高力士は仏教徒であり、李白は熱心な道教の徒であった。李白を宮廷に紹介した道士の呉筠（ごいん）が宮中で高い地位に上ることを高力士は警戒して、その地位を弱めようとしていたことも李白に影響したと思われる。

李白の友人魏顥（ぎこう）は、李白の敵は張垚（ちやうぎ）であったといっている。李白が任官の約束を与えられたとき（それは中書省の舍人であった）張垚が介入して、この任命を取り消させたことを伝えている。張垚は有名な宰相張説（ちやうえつ）の次男で、皇帝の娘婿であった。帝は李白に時々詔勅の文章に最終的な文筆上の推敲を加えるよう求めた。娘婿の張説も似たような執務にあったので李白を危険な競争者とみなしたのは当然であった。李白自身は次のように語っている。

讒は英主の心を惑わしめ
恩は佞臣の計により疎し

讒||ざんげん、佞臣||口先がうまく媚びへつらう家来
「李白 A・ウェイリー 岩波新書」

◆これに関連した趙飛燕と楊貴妃の話を作家陳舜臣が書いているので紹介しましょう。

中国の国花は梅である。牡丹（ぼたん）ではない。牡丹という名称は意外に新しく、唐以前にはなかったと言われている。それが盛唐以降になると、にわかに花の中の花になったのである。かえりみられなかった牡丹が時代に迎えられたのである。

美女も時代によって基準が異なるようである。前漢の趙飛燕はほっそりして、人の手のひらの上で舞うことができたという。誇張があるかもしれないが、スリムな女性であったのはたしかだろう。戦国の楚の靈王は腰の細い女性を好み、宮女たちは腰を細くしようとして絶食したので餓死者が出たというエピソードがある。

ところが、唐代の美女は豊満でなければならなかったようだ。唐の美女の代表はなんといっても楊貴妃だが、彼女はライバルの梅妃に肥婢（ひへい）（デブのはしため）と罵られている。グラマーであったのだ。唐代の人たちはそれに美を感じた。おなじ審美眼が花に向けられるとき、牡丹がクローズアップされるのは当然であろう。また牡丹が他の花よりやや遅れて咲くのも、人々に愛惜される一因であったように思う。梅は春のさきがけであり、牡丹はしんがりである。蓮は清浄であるが、あまりにも色気が無すぎる。国色（国一番の美人）といえるのはやはり牡丹であり、この花が咲くころ人々は花見で都じゅうを騒がせる。

「唐詩新選 陳舜臣 中公文庫」

◆李白の出生については、正確なことはわからない。李白の死を見守った同族の李陽冰が李白の詩集に付した序文によると、李白の遠い祖先が隋末に、無実の罪によって西域に流されて以来九十年ほどのあいだ、李家は西域（碎葉キルギスとも・条支シリアとも）に姓名を変えて住みついていたが、李白の父親（名前は不明、名を出すことが憚られる事情があったのだろう）は隊商を組んで中央アジアと長安を往復していた商人だったという。その後綿州に移住したという。綿州は今の四川省江油県で、成都の北東約百五十キロ、揚子江に流れ込む涪江（ふこう）の沿岸にある。李白には西域人の血がまじっているという説があるが、おそらくはそうであろう。二十五歳の時に、四川省を離れて放浪の旅に出るまでのことも、実際にはわからない。三十歳の時仕官を求めるため地方の官僚にあてて書いた書簡が何通か残っているが、それによれば少年時代は四川の山奥に住んで町には出ず、小鳥を

相手に暮したという。二十歳のころには成都に出て学問をしたが、学問よりもむしろ酒を飲み、剣を好み女遊びもし、遊侠の徒と交わって人を斬り殺したこともあるという。

科挙の試験を受けて官僚になる志は、全くなかったようである。四川省を出て放浪の旅に出たのは、李白自身は楚(湖北省)の名勝を見物したかったからだと言っている。そして湖北の安陸に腰を落ちつける。そして二十八歳の時、高宗(三代)のときの宰相だった許圜師ぎよしの孫娘と結婚した。李白はこの結婚を、許家に見込まれ、たのまれて婿になったと言っているが、内実はわからない。往年の勢力はないとしても許家とはかく名家である。名家の娘と一介の放浪書生との結びつきには、李白の心の動きのなかに何かがあったのかもしれない。もしかしたらそれは名誉欲、立身欲に近いものだったかもしれない。地方官僚にあてて何通かの仕官を求めるための書簡を李白が書いたのは、許氏と結婚してからである。

しかし仕官の道は得られなかった。安陸には約十年間、腰を落ちつけていた。李白の生涯の中では、一か所に住みついた最も長い期間である。ここで子どもが生まれ明月奴という幼名をつけていた。妻の許氏は早逝したとも離婚したともいわれる。李白はその後三回、通算四回結婚したというのが通説になっている。その後、また旅に出る。山西の太原へ行き、引き返して山東の袁州えんしゅうへ行き、任城に住み(ここで酒樓を経営していたという伝説もある)、遊侠の徒と交わる一方、道士たちとも交わった。

「旧唐書」の文苑列伝のなかの李白の伝によると、李白はこのころ山東の徂徠山に孔巢父ら五人の仲間と隠棲し「竹溪の六逸」と呼ばれたという。その後、山東から離れて江南に遊んだ。江南を旅しているとき呉筠ごいんという道士と道ずれになる。呉筠は李白と別れてから長安に行く。そして玄宗に召されたとき、李白を推薦した。それによって李白は朝廷に召され、翰林供奉として玄宗の側近に仕えることになった。おそらくこのころ文部次官を務めた有力者、賀知章がしやうの知遇を得たことがあり、また玄宗も李白の詩名を耳にしていたのであろう。こうして李白は宮廷詩人になる。翰林供奉は玄宗のときに充実された機関で、皇帝が気の向いたとき、呼び出しに応じるだけで執務所もなく、官位もなかった。お召が無ければ毎日出勤する義務もなかったらしい。文学家や音楽家がそこに席を与えられていた。しかし後に詔書の起草までまかせられ重要なポストとなった。

李白が翰林供奉の職を免ぜられたのは、七四四年である。長安を去って汴州べんへ行き、南下してまた江南の地を遊歴する。そして七五三年ごろには、安徽省あんきの宣城から、池州の秋浦へ移る。七五五年安祿山の乱がおこった。玄宗の子であり肅宗の弟である永王、璘はこれを討つために兵を挙げた。

李白は招かれてその水軍に参謀として加わる。ところが永王は肅宗と兄弟仲が悪かったために叛軍とみなされる。捕らえられた永王は殺され、李白も捕らえられて潯陽の獄に入れられるが、罪一等を減ぜられて夜郎国(貴州省)に流される途中、大赦にあい放免された。以後、揚子江下流の各地を放浪しているうちに、過度の飲酒のためであろう、病を得て(膿胸穿孔のうきゅうせんこう)、七六二年当塗(安徽省)の県令をしていた親戚の李陽冰のもとに身を寄せ、この人に見守られながらその波乱の生涯を閉じた。時に六十二歳。今日残っている詩は一千首あまり、絶句と樂府にすぐれた作が多い。

「中国古典散步 駒田信二編 文春文庫」 「天空の詩人李白 陳舜臣 講談社」

◆李白は、一生を旅をして詩人として過ごした。唐の時代、詩を作ることは高い評価を与えられていたが、李白はただ詩人として受け止められる事には満足しなかった。高官でもなかった職業詩人は、少なくとも存命中には低い社会的地位に甘んじていたというのが真相である。宮廷では詩人のほか医者、占い師、手品師、と同じ階級に分類されていた。詩人は官職を持たず、地位を示す記章

を持たない。李白は高官になりたかった。彼の文章には「私は英明な統治者の助けになりたいと願った」「私は帝国の政策を論じたが空しかった。紫の飾り帯（二品・三品）が私の腰に結ばれることはなかった」とある。

「李白 A・ウェイリー 岩波新書」

六 司馬遷が刑罰を受けたわけ

漢の武帝のころ、つまり紀元前二世紀のころ、太史令（国の記録、天文星暦を掌る役所の長官）となっていた司馬遷は、匈奴に捕虜となつた將軍李陵を多勢に無勢で、よく持ちこたえたと弁護したため宮刑を受けた。四十八歳の時である。宮刑とは、生殖器を切除する刑であり、腐刑とも呼ばれる。当時のしきたりでは、金を積めば罪一等を減じられたのだが、司馬遷は金がなかったのである。

李陵と司馬遷はかつて共に侍中（漢代では天子の侍従）の職にいたことがあり、李陵の人物をある程度知っていた。

刑罰に五刑があつた。周代は墨（いれずみ）・劓（鼻切り）・剕（足きり）・宮（去勢）・大辟（死刑）である。漢の五代皇帝の文帝は肉刑を廃止した。劓と腓（足きり）である。そして初めて刑期という時間が中国の刑罰に導入された。服喪も天子、父の死は三年（足かけ三年、二十五カ月）であるが、三十六日間だけ服すればよいとした。このような寛容な政治は後に「文帝の故事」とされ、文帝の功績とされた。隋以後は笞（むち打ち）・杖（棒でたたく）・徒（懲役）・流（島流し）・死刑の順で、このとき宮刑は廃止された。

さて司馬遷の刑であるが、その前後のいきさつと背景は次の通りである。

漢の武帝の頃、將軍衛青・霍去病が匈奴遠征で勝利をおさめ、漢の対匈奴戦争はひとまず終息していたが、このころ匈奴の内部で、単于と左大都尉との間で争いがおこった。それは年少の単于が人を殺すことを好んだため、左大都尉が単于を殺して、漢に降服しようとしたことによる。

この知らせを受けて漢は帰緩の西方に受降城を築き、左大都尉を援助するために將軍に二万騎を率いさせて、匈奴に向かわせた。まさに十六年ぶりの出兵である。しかし漢軍が到着前に、単于は左大都尉を誅殺し、八万騎の兵で漢軍を包囲して漢軍は全員匈奴に降服してしまった。

この出撃失敗後、漢は塞外に出撃して列城を築き、駐屯部隊を配置するとともに、居延方面にも築城したが、匈奴によってこれらは破壊されてしまった。両国の外交折衝も進められ、単于から関係改善の提案の書状が送られてきた。これなら和睦の可能性ありとして蘇武の派遣となった。

蘇武は中郎將として節（使者の印として皇帝から授かるからうしの毛飾りのあるはたざお）を携えて匈奴に向かった（前一〇〇年）。しかし和議は成立しなかった。しかもこのときすでに匈奴に降服して丁靈王とされていた漢の衛律によって匈奴への降服を強要され、自殺しようとしたが果たせずそのまま拘禁されて穴倉に入れられた。さらにバイカル湖付近の荒野に送られた。

こうして蘇武はその後十九年間、匈奴への降服を拒否し続け困苦を絶した抑留生活をつづけた。

蘇武が出使した翌年（前九九）武帝將軍（武帝は大宛国の地名）李広利は匈奴討伐を命じられ、三万騎を率いて酒泉から出撃した。李広利軍は天山山脈の東で匈奴の右賢王軍を攻撃して、一万余の首級を得たが、その帰途匈奴の大軍に包囲され全軍の六、七割を失う敗戦となった。

このとき李広利の軍と並んで居延から出撃した小部隊があった。歩兵五千を率いた騎都尉（近衛騎兵隊長）李陵である。李陵は隴西の名族の出身で前將軍李広の孫であった。

はじめ李陵は李広利の配下で輜重隊を指揮することになっていたが、自ら請うて五千の歩兵を率いた。李陵は李広利を將軍として評価していなかった。李広利は武帝の愛人李夫人（歌姫だった）の兄で、歌舞芸人の出身であったが、武帝が手柄をたてさせてやりたくて拔擢したのである。

李陵は李広利の配下になるのを嫌ったことから、武帝はおまえにはもう授ける騎兵はないと言って五千人の歩兵だけをあずけて別動隊として許可した。歩兵五千は、単于の率いる三万の匈奴軍主力と遭遇した。騎馬が主体の軍である。李陵は山林の中に布陣して八日間にわたる激戦のすえ、李陵軍の大半が死傷し降伏した。李陵は捕虜とされた。漢の砦にたどり着いた者は、わずか四百余人だったとある。この報告を受けた武帝は激怒した。

その後、漢では李陵が匈奴の軍を訓練しているという誤報を得て、その母、妻子、兄弟をことごとく誅殺してしまった。

もはや逃れて漢に還るのぞみを失われた李陵は心に漢を想いながらかれの勇猛を愛して優遇してくれる単于の好意を受けて、その女を妻とし匈奴の右校王となった。

当時抑留されていた蘇武と李陵とは、ともに長安で侍中（漢では侍従の職）をつとめた友人の間柄であった。十数年後、李陵は遠くバイカル湖付近にこの旧友を訪れた。ともに郷里に帰る望みを失った二人であるが、このとき両者の境遇はかけ離れたものとなっていた。蘇武がその郷里では一家離散し、その妻も再婚していたにもかかわらず、漢のためにこのように困窮しているのを見て、李陵は匈奴への投降を勧めようとする。しかし蘇武は応じない。蘇武もまた李陵がその一族を族誅された苦しみを思えば、かれが匈奴の臣となっていることを責めることはできなかった。

のちに武帝が死去し、昭帝が即位すると、漢の使者が匈奴に至り李陵に漢への帰還を勧めた。しかし李陵はこれを拒否して匈奴にとどまることを決意する。そして前八一年、蘇武が十九年の抑留から解放されて、漢に帰還することが決まったとき、李陵は蘇武のために送別の宴を開きかれの忠誠を称賛する。このとき二人の間に交わされた詩が「文選」に載っている。

李陵が蘇武に与えた詩の中に、「風波ひとたび所を失えば、各々天の一隅にあり、長くまさに此れより別るべし」、というくだりがあり、蘇武が李陵に与えた詩の中に、「伏して覩れば江漢流れ、仰ぎて視れば浮雲翔ぶ、良友遠く離別し、各々天の一方に在り」という句がある。浮雲と

流水が並べられると中国の文人はかならず蘇武を連想するのである。

李陵が匈奴において世を去ったのは前七四年である。降服してから二十五年の歳月がたっていた。

ここで話をもとにもどすと、前九九年武帝じし將軍李広利は兵の大半を失って帰還した。李陵が力戦のすえ投降したのもこのときである。武帝はこの失敗を取り戻すため、二年後の前九七年、李広利に命じて再び匈奴に出撃させた。各軍合計二十万の大軍である。单于是この大軍を知って、人や物をこごとく北方に移し、十万騎で余吾水の南に待ちうけ、李広利と十日間にわたって交戦したが勝敗がつかず両軍とも軍を引いた。

その後しばらく匈奴の侵入、漢の出撃がなかったが、前九一年になると李広利は三たび匈奴に出撃する。こんどは総軍十四万余である。この作戦で李広利軍だけが匈奴を追って深く奥地に進撃して、左賢王と左大将の軍二万騎と戦って左大将を討ち取るという勝利を得ながら、その帰途を单于の率いる五万騎によって遮断され、夜襲を受けて壊滅し李広利自身は匈奴の捕虜となった。单于是李広利が漢の重臣であることを知っておりその女むすめをかれの妻にするなど優遇した。しかし彼の投降生活は一年余りで怪奇な殺され方（巫のお告げ）によって終わった。

蘇武といい李陵といい李広利といい、漢の將軍として遠征して匈奴と戦い、彼らの行動を決定させた契機はいずれも漢帝国への忠誠心であったことは間違いない。

司馬遷の出獄は二年後（紀元前九六）であった。ここに司馬遷は一大奮発し「史記」の本格執筆に専念することになった。史記百三十編を完成させたのは、紀元前九二〜八九年のころと言われる。司馬遷の死は、武帝の死後一年の紀元前八六年である。享年六十。

「秦漢帝国 西島定生 講談社学術文庫」 「李陵 護雅夫 中公叢書」

（日本の作家、司馬遼太郎は司馬遷を崇拜し、作家名としたが、自分は遼はるかに及ばない男と言う意味を込めたと述べている）